

デュルプヘルト教授の功績

— 希臘考古學の六十四年 —

角 田 文 衛

義にシュリーマン夫人及びツングス教授を喪つた希臘の考古學界は、本年四月、斯界の耆宿デュルプヘルト博士逝去の悲運に際會した。

ヰルヘルム・デュルプヘルト教授 (Wilhelm Dörpfeld) は一八五三年十二月廿六日、獨逸ライン州の工業都市ベルメン (Barmen) のヰッペルトール (Wuppertal) に生誕された。其れはデュッセルドルフに接した小都市で、教授は此處で嚴父の經營されてゐた國民學校を終へて文科高等學校へ進まれた。此の頃、學校の附近に土砂に埋れた中世の廢屋があつたが、教授は子供心に此れが發掘

法を考へられたと言ふ。やゝ長じて高等學校時代にはヰッペル河畔の城や僧院の廢址を屢々見て歩かれたが、たま／＼ゼルシャイド (Selscheid) 附近の城壁をシュマツハア (J. Schnacher) が發掘修理してゐるのを見學し、深い感銘を受けられた。尤も、教授をして考古學者に走らせたのは、決して郷里に於ける古建築ではなかつた。

高等學校の頃、教授は神學と教育學とを一心に勉強されたが、嚴父は此れを知つて、其の畢生の事業たる實際的・神學的教授法の研究に教授を向けようとした。併し教授はかゝる形而上的なものに殆ど才がなく、いつも實際的な仕事、特に建築に惹かれる自分を知つてをられた。それで一八七二年の復活祭に高等學校を卒業された時、

嚴父の希望に反し、建築家となるため、ベルメンの土木建築局に這入つて、實地の仕事に従事された。何故ならば、當時、公許の建築家 (Baumeister) となるには、一年間實地に働いた後、三年を高等工業學校で勉強し、かくて建築技手 (Bauführer) 試験に合格し、なほ若干年、實地に活動した後、建築家試験を受けねばならなかつたからである。

かくて一八七三年の秋から七六年まで伯林の建築學院 (Bauakademie) 後のカールロッテンブルク高等工業學校 (Technische Hochschule Charlottenburg) で勉強された。此の三年の學堂生活の一年を教授は近衛歩兵アレクザンデル第一聯隊に過して豫備少尉になられたが、その外の休暇にはいつも鐵道や工場の工事の實際に従事されてゐた。一八七六年十月の或晩、友人のジーボルト (C. Siebold) が當時の碩學アドラア教授 (F. Adler) の建築史の講義から戻つて來て、デュルプヘルト教授にアドラア教授が語つたアネ城山のプロビレーア建築の謎を話した。デュルプヘルト教授は友人の話に興をえ、

プロビレーア建築を實測圖について研究したあげく、此の未完成のプロビレーアの謎を解くことが出來た。ところが數日後の技手試験にアドラア教授は偶然にもプロビレーアを問題として提出した。デュルプヘルト教授は略圖を描いて詳細に謎の部分を解釋したため、アドラア教授は全く驚歎されてしまつたと謂はれる。此れが教授の人生の岐路を決定したのであつた。

技手試験に優等で合格した結果、教授は伊太利旅行の賞金を獲得し、一八七七年の末を南伊太利やシチリヤに送り、希臘の神殿、劇場を初め、ボンペイ、ヘルクラネウム等の遺跡を詳かに見學し、建築家としての教養を深められた。

一八七七年の正月、アドラア教授の建築局に採用された教授は、其の年の半ばをあまたの教會の實測に過された。其の夏、オリュンピアの發掘で働いてゐた建築技手シュタインブレヒト (Steinbrecht) が個人的理由で辭職したため、クルチウス教授 (Ernst Curtius) と共に同發掘の總指揮に當たつてをつたアドラア教授は、其の後

任としてオリュンピヤ行きを慫慂した。かくて九月、發掘の技術建築上の主任であつたポーン教授 (R. Bohn) の助手として、同教授に伴はれてデュルプヘルト教授は希臘へ赴かれたのであつた。實に教授廿四歳の時であつた。

ポーン教授がオリュンピヤを去つた後も、教授はずつと現地に留まり、一八八一年の發掘完了までオリュンピヤにあり、ヘラ神殿、メトローン、寶庫等々の主要遺跡の發掘に従事された。オリュンピヤに於いて教授はクルチウス教授より古典學の、アドラア、ポーン兩教授よりは建築史學の指導を受け、不出世の天才を益々琢磨することが出来たのである。

オリュンピヤの發掘が一應完結すると、教授は發掘の協力者であつたボルマン (R. Borrmann) と一緒にアテネに赴き、この城山の研究を始められた。時恰も、有名なスタマタキス博士 (P. Stamatakis) がアテネの城山を發掘されてゐたので、此れに参加して研究されてゐる間に教授はかのハインリヒ・シュリーマン博士 (Hein-

rich Schliemann) と相見るに至つたのである。

一八八一年の末、教授は建築家試験を受けるため柏林へ戻り、優秀な成績をもつて合格された。そして教授は希臘建築研究のため、再び希臘行きを志された。先づ柏林の獨逸國立考古學中央研究所は當時ケーラア教授 (U. Köhler) が統率してゐたアテネの考古學研究所 (Deutsches archäologisches Institut in Athen) の發掘技術者として教授の入所を求めた。當時、トロヤ、ミュケーネの發掘によつて、赫突たる名聲を博してゐたシュリーマン博士も、生涯の半ば以上を實業に捧げたことに基づく、科學的發掘法の不備に惱んでつた。それでシュリーマン博士はデュルプヘルト教授に、ホメロス世界を闡幽せんとする彼の壯大な計畫を打ちあげ協力を求めたのであつた。更に、希臘政府は教授に、アテネ城山の發掘の援助を求めて來た。かやうな次第で一八八二年の初め、教授はアテネに再來して建築技師として研究所に這入り、一年の半分をもつて、シュリーマン博士及び希臘政府を助けられることゝなつた。^①

先づシュリーマン博士との協同調査の方では、早速一八八二年にトロヤの第二次發掘を試みられた。ミヘリス教授も指摘したやうに、シュリーマン博士の發掘法は洵に少年じみた、素朴なものであつて、彼は燒市と謂はれるトロヤ第二市をホメロス時代の其れと誤認した程であつた。デュルプヘルト教授はホメロスのトロヤが第六市である事實を直ちに立證されたのみでなく、シュリーマン博士に依つて不秩序かつ亂暴に掘られてゐた遺跡を精密に觀察して記録にとめ、進んで第一市や第七市以降をも詳細に調査し、かくて好事家的な破壊からトロヤを救はれたのである。

一八八四年から翌年へ互つて、教授はシュリーマン博士と共にアルゴス州チュリンスの城山を發掘された。該遺跡はミュケーネの其れに較べれば、極めて小規模ではあるが、併し其のキュクロープス風の城壁や宮殿址、倉庫等の完全に遺存してゐることは後者を凌駕してゐる

ので、該發掘がミュケーネ文化の闡明に寄與したことは盡大であつた。そしてチュリンスの調査は當初から博士が携はれたことゝて、完備した發掘と記録をなすことが出来た。一八八六年にはシュリーマン博士に伴はれて教授はクレイテ島に渡り、クノッソス宮殿址を視察された。けれども一八九〇年に於けるシュリーマン博士の逝去に至るまで、兩博士はトロヤの調査に忙殺され、クノッソスに手を着ける餘裕がなかつた。またポイオチャ州のオルコメノスの穹窿墳を協力して發掘されたのも、同じく一八九〇年であつた。

一八八四、五年の頃はまさに教授の壯年時代であつて、教授は左記の如く日として休むことなく實地調査に従事されたほか、寸暇をえては熱心に古典の研究に努められた。中でも最も教授が心血を注がれたのは『オデュッセイア』の研究であつて、教授は古代方言と遺跡の二方面から此れを考察し、獨特な研究を企てられた。然も慎重な教授は一九二五年に至るまで其の成果を發表されなかつたが、大體の考案は既に壯年時代に出來上つたものと

謂はれる。

次に考古學研究所の仕事としては、一八八二年、アルカディア州テデア遺跡^③の中核をなすアテナ・アレア神殿(ドリヤ式)を手初めとして、翌年には著名なコリントのアポロ神殿を調査された。そして同じ一八八三年にはまたパウサニアスの開卷第一頁にあるアツチカ州スニオン岬のポセイダオン神殿を發掘し、學界をして等しく刮目せしめられた。

デュルプヘルト教授は更に希臘政府の請ひを容れ、同國の統一的調査研究機關たるアテネ考古學會(Ἀρχαιολογική Ἐταιρεία ἐν Ἀθῆναις)の事業を欣んで援助された。先づアテネの城山の發掘は、上述の如く、スタマタキス博士を助けられたが、有名なカヴヱリアス博士(P. Kavva-dias)が彼に變つてからも、終始一貫して發掘を助けられた。アテネ考古學會の刊行に係かるアテネ城山の發掘報告は今や古典的價値をもつてゐるが、かゝる研究を成就せしめた處には、教授の並々ならぬ努力の存することゝを私達は想はねばならない。特に、ペロピレーア所謂へ

カトンペドンの研究に於いてさうである。言ふまでもなくヘカトンペドンはパルテノンとエレクテオンの間に在つた波斯戰役以前の神殿であるが、デュルプヘルト教授は一八八五年の秋に、始めて此れが遺址を發見し、學界に聳動を興へられた^④。そして教授は、ヘカトンペドンは波斯人に破壊された最古のアテネ神殿であると考證されるのである。

けれども、教授の縦横の活躍は此れで終るやうなことはなかつた。即ちアテネのディオニュソス劇場の第一次調査(一八八五年以降)、ハドリアヌス圖書館(一八八五—一八六年)、市場、オリュンペイオン等の發掘を初めてして、アツチカ州のオローボス、エレウシス、アルゴス州のミテケーネ及びエビダウルスの發掘にも参加され、或ひは實測を分擔し、或ひは發掘に天才を閃かされた。

城山の北麓に接するアテネの市場の調査は、既に一八八四年に研究所の仕事として教授は着手されたが、大規模の調査は一八九一年、アテネ考古學會との協力のもとに行はれた。しかし色々な政治的事業の爲、中止のやむ

なきに至り、近年になつて亞米利加の古典研究所 (American School of Classical Studies) の手で完成をみたのであるが、教授は終始發掘に参加して援助を與へられた。サラミス島に面したエレウシスの調査はアテネ考古學會の事業としてフィリオス氏 (D. Philios) が全遺跡を購入して一八八二年に發掘を始め、一八九四年からはスキアス教授 (A. Skias) が事業を繼承した。デュルプヘルト教授は最初から絶えず現地に赴き、發掘を助け、ブレウテリオン初め重要遺跡の實測をもされた。

シュリーマン博士によるミュケーネの發掘は獅子門や堅穴墳にとどまつてゐたため、間もなくスタタキス博士が此れの補足的發掘を企てられた。そして一八八六年にはツンタス教授 (K. Tountas) が城山の頂上を發掘し、此處にアガメムノーンの宮殿址を發見して輝かしい成績を収めたが、此の際にもデュルプヘルト教授は發掘に参加し、チュリンスの經驗を以つて大いに援助するところがあつた。オローボスのアンフィラオスの聖域は一八八四年以來、フィンティクリオ教授 (S. Phintiklio) 及

びレオナルドス氏 (V. Leonardos) によつて調査が始められたが、教授は彼等の請ひによつて、神殿、劇場等の發掘、實測に従事された。特にオローボスの劇場は其のオルケストラの構造に於いて、教授の希臘劇場の研究を大いに啓發するところがあつた。

廣大なエビダウロスの大發掘はカッブディアス博士が一八八二年以來、畢生の大事業として企圖し、其の死に至るまで盡瘁されたものである。デュルプヘルト教授は親友カッブディアス博士の爲に、本發掘にも尋常ならぬ努力を拂ひ、常に傍にをつて注意を與へ、また彼のため重要な建造物や全聖域の實測を擔當された。就中、教授の興味をそゝつたのは、稀にみる保存の完好なポリュクレイトスの劇場であつた。

かやうにして教授の希臘劇場史の研究は年と共に深まり、其の成果は一八九六年、ライシシュ氏 (E. Reisch) との共著『希臘劇場』として發表されるに至つた。本書はデイオニュソス劇場を主として、エビダウロス、オローボス等々の代表的劇場の精密な實測に基づいた研究であ

る。而して該書は未開拓の分野に於いて、かくも整然と纏められたといふ點ばかりでなく、また希臘から羅馬へ至る劇場の推移を型式學的に巧みに把握してゐる點で、教授の代表作の一つに數へらるべきものであらう。

かうした寧日なき調査の上に、さながら無人の境を行くが如き教授の創見は一の考證、一の研究毎に現れ、其の不出世の天才は遍く認められるに至つた。即ち一八八五年には研究所の二等書記官に任ぜられ、一八八七年には一等書記官に累進し、研究所々長を命ぜられた。此れは教授が卅四歳の時であつて、爾來廿五年間、教授は此の重職に身をおき、幾多の發掘を企劃し、あまたの研究を指導されたのである。

三

さて所長として實行に關する計畫は、(一)ベルガモンの發掘、(二)『オデュッセイア』の實地研究及び、(三)從來關係した發掘や調査報告の仕上げなどであつた。先づ小亞細アシア州のベルガモン(現稱ベルガマ)の廣大な

遺跡は一八七三年、フーマン(C. Humann)が其のゼウス祭壇より浮彫を若干伯林に齎してから、いたく注目され、其の結果は一八七八年から八六年に亘つての大發掘となつた。即ちコンツェ教授(A. Conze)はフーマンと共に、王城を中心として發掘を試み、王宮、庭園、ゼウス祭壇、アテーネの聖域、トラヤヌス神殿、劇場等を發見、調査し、素晴らしい成果を得たのであつた。デュルプヘルト教授は最後の年に發掘に加はり、其の重要性に深く想ひを致されるところがあつた。

かくて教授は全遺跡を明るみに出さうと決意し、研究所の一大事業として一九〇〇年から發掘を始められた。即ち全獨逸の希臘考古學者の來援を求め、王城に引き續いた下市の市場、泉、體育場、浴場、エクセードラ、ヘラの聖域、住宅等々の遺址を發掘し、自身は其の主任者として絶えず現地にあつて指揮し、此れが實に十二年間に及んだのである。洵にベルガモンの發掘はオリュンピアの其れと共に獨逸が行つた二大事業の一つであつて、コンツェ、デュルベルト兩教授は此の大發掘を遂行する

に當たつて實に用意周到であつた。即ち本國及びアテネの研究所からそれ／＼の専門家を集めたことは勿論であるが、現地には心地よい宿舍を造り、またディケリ港との間に甘哩の道路を新設し、發掘及び遺物の運搬などに遺憾なきを期したのである。デュルプヘルト教授は一九一三年から主任をクナックフス博士(H. Knackfuss)に譲つたが、プリニーが「亞細亞に於ける最も著名なる都市」と述べたベルガモンの全貌は此の頃に闡明されたと言ひうる。伯林のベルガモン博物館やイスタンブール博物館を訪れて、優れた出土品の數々、特にゼウス祭壇の巨人と神との鬪争を現した雄渾なあまたの浮彫を目撃した人は、希臘風時代の偉觀をなしてゐたベルガモン帝國の榮華を偲ぶと共に、刻苦經營せるデュルプヘルト教授の勞苦に想到せざるを得ないであらう。

次に教授が最も腐心されたのは、ホメロス世界の闡明であつた。トロヤを初めとして、ミュケーネ、チュリンス等の調査によつて『イリアドス』に一大光明を與へられた教授は、今や獅子奮進の意氣を以つて『オデュッセイ

ア』の究明を志されたのである。叙上の如く、『オデュッセイア』の研究は、一八八四年頃から絶えず教授の關心事であつたが、愈々此の前後から教授は實地調査に乗り出されたのであつた。さうして學界に一大衝擊を與へたのは所謂『イタケー島問題』であつた。

十九世紀の多くの學者は、流石のシュリーマン博士さへも、オデュッセウスの故郷イタケー島は現代のイオニヤ諸島のイタケー島であると信じて疑はなかつた。たゞ僅かにヘルハア(R. Hercher)のみが、一八六六年に現在のイタケー島がホメロスの記述と少しも符合せぬことを指摘したに過ぎなかつた。ベルガモンの發掘は晩秋から初春へかけて中止されることになるので教授は此の期間を利用してイタケー島、レウカス島、コルフ島へ渡り、充分な調査を遂げられることが出来た。かやうにして教授は「オデュッセウスのイタケー島は現今のレウカス島なり」との結論をえ、學界をいたく驚愕せしめられた。教授は此の事實を多くの論文に於いて考證されたが、其の総合的な論考は『古代のイタケー』として、一九

二七年に至つて發表された。而して本問題の實地研究に際しては、グレスラア教授 (P. Grosler) が「*シムデュルプ* ヘルト教授のよき協力者であつた。

『オデュツセイア』にはイタケー島に就いて、「かしこにはネーリトンなる、木立さやぐ、をちかたよりすら際だちたる山あり。其の周りには、ドーリキオン、サメー、並びに樹々蒼く茂れるザキュントスなどの島、あまた相隣りして横たはれり、イタケーのみは本土に近く、遙か暗き方にあれど、他の島々は其れより離れ、曙と陽に向ひて横たはれり。」と叙べてある。此れによつて、私達は容易に、イタケー島は、(一)當時オデュツセウスの領地であつた四島中、たゞ獨り離れて西に存し、(二)他の三島はその東に相接して横たはること、(三)イタケー島は本土に接してゐる諸事實を看取することが出来、此等が現在のイタケー島に合致せぬことは明瞭である。古典時代の著作家は、コルプ島はイタケー島の西、ピュロスはイタケー島の東と誤解してゐた故、(一)・(二)の方向の東西は南北と訂正されねばならない。かくして地圖を眺

めると、北に離れ、本土に接したレウカス島が古代のイタケー島であることが自ら歸結されて来る。そしてザキュントスは現在の同名の島であることに疑ひがない。然らば、小い方の現代のイタケー島が古代のサメー島に、ケハアレニヤ島が古代のドーリキオンに該當することが考へられるのである。

かやうにして古代のイタケー島をレウカス島に求められたデュルプヘルト教授は、島の各地を調査された結果、更に島の中部東海岸のニドリ平野にオデュツセウスの故地を比定された。そしてギルヘルム二世の後援を得て、ニドリ町に宿舍を設け、一九〇一年から發掘を始めて平野の各地を調査し、一九〇五年から一九一三年まで漸次規模を大にして、素晴らしい結果を得られた。先づ教授は、オデュツセウスの都城をニドリ平野の西端に横たはる丘に求められた。即ち其れは、「我等はネーリトンの山麓なるイタケーより來れり」とあり、また「かくて彼等、船と渡津海とに降り來れば」とあるに合致するのである。

教授は平野を南北に貫いて幾多の試掘溝を穿ち、其の

結果、ニドリ平野の各地に、古墳墓地、泉、聖堂、住居等の諸遺跡を發見された。さうして土器を初め、多くの遺物を得られたが、其等を一括して教授は、ニドリ町のレウカス・イタケー博物館に陳列した。著しい遺跡は、教授が平野の東南に見出された十五基の巨墳や北部及び西部で發見された墓地であつて、前者はミュケーネ時代の圓形石塚である、更に教授は、平野の西南端に、都市の水源であつた泉の遺構を發見され、此れこそオデュッセウスがエウマイオスに導かれ、都に近く辿りついた。

「市民が波む、美しく湧き出づる、構へ見事なる泉」^⑩である」と考證された。もとより乞食さへが平然と這入りゐたイタケーの館であつたから、其れはミュケーネ、テュリスの如く堂々たる宮殿であつた筈はない。従つて上述の丘に明確な宮殿の遺構がなくとも、巨大な古墳や規模の大きい墓地の存在から、該平野がミュケーネ時代の中心であつたことは否定しえぬところであり、ひいては此れをオデュッセウスの故地に當てることは妥當である。

教授が右の如き見解を發表するや、學界はいたく衝動を受けて、賛否の兩論が生じ、囂々たる論争が惹起された。此の際強く反對したのは英國の學者達であつて、

(一)レウカス島は島ではなく、濕地によつて距てられた半島であること、(二)ホメロスのイタケー島をレウカス島とすれば、何故にかゝる名稱の變轉が行はれたかを説明しえないことを掲げて、教授の説を否定した。併し此れはレウカス島がホメロスのイタケー島でないこと的主張であつても、現在のイタケー島がホメロスの其れであるとすゝる根據たりえぬのである。それで英國アテネ學會(British School at Athens)はイタケー島に於いて、

アエトス初め若干の遺跡を發掘したが、何等顯著な遺構を採し出せなかつた。デュルプヘルト教授は、(一)に對しては、パールッチ(J. Parsch)の研究を引き、レウカス島は近年隆起して半島たらんとしてゐるが、古代にはずつと沈降してをり、従つて本土からかなり離れ、かつ周圍に多くの小島を點綴してゐた事實を以つて答へられた。(二)に關しては、ドリヤ人によつて大陸から追逐さ

れたケハアレニヤ人がドーリキオン島に逃げ來たつて、島に其の部族名を冠したやうに、古代イタケー人もドリヤ人に追はれて、サメー島に逃げ、其處に彼等の新しい都市イタケーを建設し、かくてサメー島は爾來イタケー島と呼ばれるに至つたことを指摘して應酬された。そしてサメー島を追はれたサメー人がケハアレニヤ島に逃げて建設したのは、今日なほ遺跡の存するサモスであると説かれた。右のやうな次第で、反對説も漸時影をひそめ、今日では學界は此れが全面的承認に傾いてゐるのである。

次に『オデュッセイア』卷六に詳さに叙べられてゐる、ヘアイエーケス人の國で、例のアルキノオスが統治してゐたスケリエ (Skylakia) に就いては、從來、此れを全く詩的假空の國とする説や、『スケリエ』をヘプライ語・アラビヤ語の『支張所』の義と解して、其れをアラビヤに求めた説、甚だしきは『スケリエ』が島であることが明記されてゐるにも拘らず、其れを希臘本土に求めた説等々が⁽¹⁰⁾行はれてゐた。デュルプヘルト教授は此れが闡明に志し、

古のスケリエ島こそは現在、風光明媚を以つて知られるコルフ島であると結論されるに至つた。一九一四年の春、教授はコルフ島の西北部に發掘を試み、破壊甚だしいミューケーネ時代の聚落址を發見されたが、これをアルキノオスの宮殿址と認定されるには至らなかつた。此の際、教授が、『……しかしヘアイエーケス人が此の島に住んだに違ひないといふ私の見解はその爲に少しも揺ぐものではない。ホメロスの叙述が如何に實地に合致せずとも、實地はたゞ發掘によつてのみ定められる。そしてアルキノオスの宮殿は結局、鐵のみが此れを決定するであらう』と述べられた言葉⁽¹¹⁾は教授のホメロスに對する態度を忖度するに足るであらう。

同じく『オデュッセイア』卷五に詳しく述べられてゐる。ネストールの『造營置はしき都』⁽¹²⁾ピュロスの位置に就いては、現今のメッセニヤ州のピロスであることは疑ひがない。即ちスケリエ、イタケー、サメー、ザキュントス、ピロスを結ぶ線は、沿岸航海の當時にあつては重要な交通路であつた。そしてテイレマコスがピュロスを下

船して陸路スパルチーに赴いたことを考慮すると、一層ピュロスの重要性が窺へる譯である。デュルプヘルト教授は、ネストールの宮殿址を見出さうとし、一九〇七、八年に互つて、先づいまゴネチャ時代の城塞となつてゐる城山を發掘し、宮殿の土臺や城壁を明るみに出し、夥しいミュケーネ時代の土器を得られた。更に教授は城壁の外側に三基の穹窿墳を見つけ、此等を發掘された。右の三基は、ミュケーネ、グファイオ、オルコメノスの其れと同じ構造であつて、此の地がミュケーネ時代の王城であることが確認された^⑩。そして此の王城こそネストールの『光輝ある館』であると推定されたのである。かくの如く、教授の永年の努力により、トロヤを初めとして、テュリンス、イタケー、スケリエ、ピュロス、ネーリコス^⑪など、ホメロス世界の主要な舞臺が續々と闡明されるやうになり、希臘史研究に寄與した功績はあげて數ふべからざるものがある。

然も私達の敬服を禁じえないことは、教授が周到なる用意を以つて發掘に當たられた許りでなく、かくも目ま

デュルプヘルト教授の功績(角田)

ぐるしい程の調査を続けながら、着々と報告を發表されたことである。先づ一八九二年にはオリュンピアの神殿、記念物に關する簡潔にして、鋭利な報告を公にされた。

就中、學界の讚歎を博したのは、ヘラ神殿の箇所であつて、此れは一に教授の綿密な觀察と『パウサニアス、希臘巡禮記』による周到な考證の賜物に外ならない。今日希臘建築を説く場合、誰しもが論及せざるをえないヘラ神殿の闡明は全くデュルプヘルト教授の勞に負うてゐるのである。一八九六年には前記の『希臘劇場』を公にされ、一九〇二年には、一八七〇年より九四年に互るトロヤ發掘の報告『トロヤとイリオン』を刊行された^⑫。教授の第一に志されたことは、此の城山に堆積せる層位を明かにすることであつて、右の層位を基準として遺物の變移を考察し、かくしてトロヤの消長を把握されたのである。博士は層位學・型式學的方法を巧みに驅使して、トロヤの組織的研究を完成し、シュリーマン博士の澁晦な著書に惱んでゐた學界の渴を醫され、ヘレスポントの女王として輝かしい光芒を放つたトロヤ文化の全貌を學術的に闡

明されたのであつた。

ベルガモンの第二次發掘の報告は各専門家がそれ／＼分擔して、一九〇二年より『アテネ獨逸國立考古學研究所紀要』に發表された。デュルプヘルト教授は一九一二年に至るまで前後六回に互つてベルガモンの下市の建築の報告を公にされ、精密な實測及び記録と周到な解釋とを以つて該報告を不朽なものとされた。

叙上の如き多事多端な研究所生活の上に、前同様、博士は希臘側や獨逸人の發掘の援助を惜しまれなかつた。十九世紀から引續いたエレウシスやエピダウルの發掘はもとよりのこと、ピレウス、テラ、スニオン、テーベ、テルモス、コルフ等の調査には進んで参加された。先づピレウスではムニキア丘の所謂小神殿や古代船庫址の發掘を助けられ、またテーベ郊外カプリ聖域に於ける研究所の發掘(一八八七—八年)には研究所長として屢々現地に赴いて指揮をされた。エーゲ海のテラ(サントリン)島に於ける大都市址の發掘は一八九五年以降、ゲルトリンゲン教授(Hiller von Gärtringen)に依つて遂行され、

市場、劇場、ディオニソス神殿、體育場を含む内市を中心とする廣大な遺跡が明かにされたが、デュルプヘルト教授は絶えず現地に赴いては、其の該博な知識と老練な發掘技術を以つて援助された。

スニオンの調査は上記のやうに、教授が青年時代に着手されたものであるが、其の後、アテネ考古學會により、スタイス教授(V. Stais)を主任とし、一八九七年から一九一五年まで行はれた。右の發掘によつて、スニオンの神殿はアテーネの其れではなく、實にポセイダオーン神殿たることが銘文によつて確かめられ、更にアテーネの其れは前者の東北に發見されたのである。デュルプヘルト教授は屢々訪れてスタイス教授と發掘を共にされた。エトリア同盟の中心地たるテルモスの調査は、一八九七年から一九〇八年までソテリアアデイス氏(G. Sotiriadis)により、一九一一年からはロマイオス氏(K. A. Romaios)によつて企てられた。本遺跡は、アポロ神殿を中核とする矩形狀を呈し、城壁に圍まれてゐる。茲で注目されるのは、此の西紀前二百年頃に修理されたアポ

ロ神殿が木材と粗製煉瓦から建造されてゐること、及び其のメトープが浮彫を施した大理石ではなく、繪畫を以つてした陶板であることなどである。デュルプヘルト教授は一八九七年に該遺跡を訪れ、夙に其の重要性を認め、爾來、學術的にまた事業の上で、何にくれとなく援助し、此の大發掘をして有終の美をなさしめられた。

コルフ島の古代神殿址の調査はギルヘルム二世の後援を得て、デュルプヘルト教授は一九〇八年始められた。

此れに刺戟され、カッブディアス博士とゾルサキス氏(F. Versakis)とはコルフ町近傍のアルテミス神殿を一九一一年から發掘を始めた。デュルプヘルト教授は翌年から發掘に加はり、ゾルサキス氏の後任たるロマイオス氏と共に、別に一神殿址を發見された。また一九一一年にコルフのガリツア神殿址が發見され、其の怪奇なゴルゴーネを現はした破風彫刻は頗る世の注意を惹いた。たまたまコルフ島に避寒中のギルヘルム二世は此れが發掘を志され、一九一三年にデュルプヘルト教授の助けを借りて發掘された。廢帝は後に此のことを追想され、『予は

コルフ島に於ける教授との共同調査を楽しく想起する。此の際、教授は考古學上の實際的力備ある確かな手を以つて予を導き、予の研究者としての性癖に價値高き刺戟を與へてくれた。』と言はれてゐる。⁽²⁰⁾ 今を時めく獨逸皇帝ギルヘルム二世の知遇をえ、其の發掘を援助されたことは、忠良なる獨逸臣民たる教授にとつて、生涯拭ひえない感激であつたのである。

上述せるところは、壯年時代に博士が没頭された仕事の主要なものであるが、以上のほか折にふれて企てられ、援助された調査研究は枚舉に暇がないのである。アテネの各國の研究所と同様、獨逸の考古學研究所でも絶えず講演會を催したが、屢々デュルプヘルト教授は新研究を提げて演壇に立たれた。教授の講演あると聽くや、アテネを初め、遠隔の地の學者や知識人が會場に殺到した。而して教授が烈々たる口調で新研究を發表されるや、聽衆一同これに魅了されなかつたことはないと傳へられてゐる。

四

デュプヘルト教授の晩年も亦、考古學者の其れにふさはしいものであつた。一九一二年博士はアテネ獨逸國立考古學研究所長を辭された。此れは健康を害したためと謂はれるが、蓋し所長の位置を愛弟子カーロ教授(G. Karol)に譲られる爲であつたであらう。時に教授齡五十九歳、永い發掘生活で鍛へた體は少しも衰へを見せなかつた。而して教授は老後を悠々自適しようとする安易さに走ることなく、燃えるが如き考古學への熱情を以つて晩年を貫かれたのである。シュリーマン博士はホメロス世界を戀ふの餘り、アテネに骨を埋めたが、デュルプヘルト教授は百尺竿頭に一步を進め、レウカス島を終生の地とされた。從來とても、レウカス島ニドリ町の舍宿に過されたことはあるが、所長辭職後間もなくこゝに居を移され、このオデュッセウスの故郷に於いて考古學的活動をされた。即ち研究所やアテネ考古學會の顧問として發掘や事業を助けられる一方、今まで携はつた仕事を完成

されようと計畫された。

けれども故國の興亡を賭した歐洲大戰の勃發は、教授が研究の續行を許さず、教授は一九一四年に希臘を去つて、伯林へ赴かれたのである。伯林では教授は毎日ベルガモン博物館に通つて、ゼウスの大祭壇の再構成に従事された。またイエナ大學の名譽教授に推され、屢々イエナの大學や國民高等學校で講義をされた。

歐洲大戰を契機として希臘政府及び各國による華やかな發掘事業は終末をつけた。其れは主要遺跡がほゞ發掘されたこと、及び戰後國內に紛擾が絶えなかつたこと、更に現在の希臘政府は國防に忙殺されてゐることともに基づくであらう。従つて各國による發掘も、従前の如き大物主義から轉じて補足的・専門的傾向を帯びて來た。デュルプヘルト教授はかゝる傾向を助成し、かゝる潮流に棹さして晩年を有意義に送られたのである。されば教授の晩年約二十年には、壯年時代の如き華々しさはないが、それだけに年來手がけた仕事を內的に深め、かつ磨きをかけられることが出來た。而して其の主要な仕事と

は、オリュンピア、イタケー及びアテネの研究の完成であつた。

さてクルトゥス教授の企てたオリュンピアの大發掘の後も、デュルプヘルト教授は此れが徹底的研究を志してられた。一九〇六年の初め、教授は該聖域の古さを調べようとして、ヘラ神殿に小發掘を試み、オリュンピアの開基が意外に古いことを強調された。②①此れに對して早速フルトゼングラア教授は、聖域發見のデイピロン式土器や青銅器等から推して、オリュンピアはドリヤ人侵入以後の經營に係かゝる旨を主張された。②②かくてデュルプヘルト教授は此れが解決は歛による外なしと決意され、一九〇七年より直ちに研究所の事業としてヘラ神殿の發掘を始め、一九〇九年まで続けられたが、種々の都合や歐洲の大戦のため、教授の計畫は完成を見なかつたのである。

それゆゑ、一九二一年、希臘への歸還がかなふや、教授は捲土重來の意氣を以つてオリュンピアの研究に着手された。即ち同年に教授は早速、オリュンピアのクロノ

ス丘麓を發掘され、翌二二年には、獨逸の考古學研究所長ブッシュョール教授 (E. Buschor) を伴つてヘラ神殿附近の層位的發掘を行ひ、更に一九二七年から二九年に互つて、ヘラ神殿の大規模の發掘を企劃し、驚異的結果をあげられた。

即ち第一は、ヘラ神殿の東南に接して、二基の楕圓形の住居址を發見されたことである。此處より出土せる石器や土器は、トロヤ第一市に比定さるべく、従つて右の住居址は前二千年紀の前半、或ひは三千年紀の後葉のものと推定された。デュルプヘルト教授は、此の住居は原始的聖域の僧または管理者の住まつたものであること、更に其等はクロノス丘麓の自然の泉を中心に集結してゐたことを説かれた。第二は、ヘラ神殿の下を注意深く發掘した結果、其の下に二つの相疊する神殿址を見出されたことである。つまりクロノス丘の西南麓に、前十一世紀に既にゼウスとヘラの神殿が建立されたこと、最初の神殿が火災で破壊してからは、其れより半米高く第二の神殿が、間もなく其の上、八十糎高く第三の神殿即ち現在

見るヘラ神殿が建てられた事實が究明されたのである。

第三のヘラ神殿は、周知の如く木材を以つて、前九世紀の初めに構築されたことは、其の直下から出土せるコリント式土器からも證明されよう。そして前七世紀に至り、木材の老朽の結果、順々に石材に換へられたのである。第三は、古典時代のペロピオンの下に、石材で固められた、古いペロピオンが発見されたことである。此れは最古のヘラ神殿よりずつと深いため、前二千年紀の後半に所屬するものと考定される。

絨上の如くしてデュルプヘルト教授は、フルトゼンゲラア教授の説を破られ、オリュンピアの開基が紀元前二千年に遡ることを明かにし、始めて古拙時代のオリュンピアの姿を學界に教示されたのであつた。

次にアテネの研究も、教授が青年時代に着手されながら、他の仕事に忙殺されて果たしえなかつたものである。それで一九二三年から翌年へかけて、希臘政府の囑託を機に、再びアテネのディオニュソス劇場を發掘された。そして前六世紀には未だ石造りの劇場が存しなかつたこ

と、俳優と合唱團はオルケストラ壇の周りで演ぜられ、特別の恒久的舞臺はなく、演題の種類によつて其の度毎に舞臺は裝置されたことを闡明し、希臘劇場史の研究に一大光明を投げられた。また亞米利加古典研究所の手で、アテネの市場址が発掘されるや、教授は絶えず現場に赴いて、援助と研究を怠らなかつた。更に一九三二年から翌年へかけて、教授はコルフ島西北部のバレオカストリッツを發掘し、ハッイエーケス人の都スケリエを其の地に求めようとされた。けれども、王者の存在を示す宮殿や巨塚の遺跡を見出すことが出来ず、アルキノオスの美しい館を復原するに至らなかつたが、齡八十の老耄を以つてなほかゝる大發掘を遂行された教授の熱情に、私達はたゞ感歎のほかはないのである。

此の頃の教授は、未だ元氣旺盛で、一方では發掘に携り、他方では獨逸の大學に講義をされるといふ具合であつたが、漸時に發掘も一應完結したため、一九二六年頃からレウカスのニドリ町に居つて、著作に専念されることが多くなつた。即ちオリュンピア、アテネ、イタケ

一の研究は縷述の如く青年の頃から興味をもち、研鑽も積まれたものであつたが、今や教授は該博な識見と圓熟せる名匠の牙えを以つて、各題目の仕上げに全力を傾倒されたのである。

先づイタケー島を中心とする『オデュッセウスの歸還問題』ともいふべき歴史地理的研究は、既述のやうに、一八八四年頃から大いに興味を抱き、壯年時代には各地を發掘し、レウカス・イタケー問題を發表して、大論争を惹き起したところである。教授は一九二五年に、『オデュッセウスの歸還』を公にし、原始形態に於ける『オデュッセイア』を論じ、更に一九二七年にはレウカス・イタケー問題の決定版とも目すべき『古代のイタケー』を刊行し、周到な考證と堅固な論陣を張り、該問題の歸趨を確定されたのである。

オリュンピアの本報告は圖版の豊富さや記述的的確さの點で、高く評價されるべきであるが、執筆者を異にするため、まゝ統一を缺き、また讀者をして全體を把握せしめるには不便であつた。デュルプヘルト教授は一九〇六年

以後の新發掘の結果を纏め、一九三五年に『古代のオリュンピア』を世に問はれた。教授の著は彫刻や銘文を軽く扱ひ、主として建築的遺構によつて、オリュンピアの起源から説き起し、遺跡の全性質を説いた基準的勞作であつて、此れが著作に前後二十八年を要したのも尤もと頷かれるのである。

古代アテネの研究は、既に一八八一年に着手され、其の後、城山、市場、ディオニソス劇場、ハドリアヌス圖書館、オリンペイオン等々の調査を経て、いよ／＼内容を深められた。かくて鋭意努力されること實に五十七年、一九三七年に上巻を、三九年に下巻を刊行されたのは、『古代アテネと其の市場』であつた。本書の出版のかく遅れたことには、アテネ市場の發掘の遅延が與つてゐるのである。該書は、城山と市場の發展を、ひとり文化的にのみではなく、政治的經濟的に把握した研究であつて、洵に碩學の終りを飾るに足る、見事な勞作であつた。

五

かやうに縦横無盡、行くところ一として可ならざるなきデュルプヘルト教授の研究が、歐洲考古學界を席捲し、其の名聲が遙か極東にまで鳴り響いたことは當然である。されば歐洲學界は等しく教授を仰いで師としたことは勿論であつて、教授には伯林大學を初め六大學から學位が贈られ、希臘政府は教授を以つて學士院の外國會員に推し、國賓の如く待遇した。

一九三三年の十二月廿六日は恰も教授の八十歳の誕生日であつたため、歐洲では教授のため記念論文集が編纂され、祝賀會が催された。此の日、世界各國より祝電が教授のもとに殺到したが、ヒンデンブルク大統領は、教授に *Dem Altmeister der Forschung antiker Baukunst* と刻したアドラア牌を贈り、親書を以つて教授の健在を祝つた。デュルプヘルト教授は泌々と來し方を想ひ、「私は八十歳の誕生日を、廿五年前、私の慈悲深い保護者ギルヘルム二世陛下がホメロスの研究とレウカスに於ける發掘の爲に親切にも私に贈り賜うた、レウカス・イタケ島の美しい家に過した」と感慨をもらし、更に「此

の百年に於ける希臘考古學の發達は目覺ましいものがあつた。私はその半分以上、即ち六十年を此れに捧げることが出来、非常に幸福であつた」と述懐されてゐる。そして人々は、此の斐然たる學界の重鎮の益々健全なことを祈ると共に、更に目ざましい活躍を期待したのであつた。事實、十九世紀の後半から歐洲大戰に至る約五十年は、各地に發掘が並び行はれた華々しい時代であり、其れから今日に至る三十年は沈靜な、併し内省的な時期であつた。其れは、地味ではあるが、眞に高く評價さるべき時代である。デュルプヘルト教授は、身を以つて此等二代を關し、常に指導者として先頭に立たれたのである。私達が、教授の生涯に特に注目する所以は、其れが單に碩學の一生であるといふ以上に、實は其れが希臘考古學發達史の象徴であるからである。

教授がアドラア教授と苦心して設計された瀟洒なオリムピア博物館を訪れた人は、入口に向ひ合つて置かれたクルチウス教授とデュルプヘルト教授の胸像の對稱に、興味をそゝられたことであらう。前者が王者の如き

氣品と峻嚴さを現はしてゐるに對し、後者は野人的風貌と絶倫な精力を湛へてゐる。兩者の共通點は、歐洲的表現を借りれば、『山猫の如き』爛々たる眼光だけであらう。胸像を一見して直ぐ、私達はデュルプヘルト教授が名利に疎く、身を持つること謹嚴、然も學に對しては獅子奮進した熱血漢であることが看取し得られるのである。

學に對してあくまで謙讓な教授は、若い學徒と膝を交へ、眞劍に議論されるのが常であつた。獨逸知識人の通弊は、徒に難澁な文を草するにあるが、教授はかゝる術學を極度に嫌はれ、いつも明快平易な文章を以つて著述された。加之、教授は自らの謹嚴さや自己の學說を他人に要求せず、所長として、發掘主任として、所員や後輩に能力を充分に發揮せしめるだけの統率力をもつてをられた。

無論、教授の一面には頑固なところもあつたが、しかし其れは理由なき頑迷さではない。アテネ城山のヘカトンペドンとかイタケー島問題などに就いて見られる如く、其れは自分が満足ゆくだけの周密な考證を経た上で

のことであつて、もとより理論の裏づけなき信念ではなかつた。そして教授による、精密な實測と觀察とを基礎とする實證的學風は、初め希臘考古學界に大影響を及ぼし、遂に世界の考古學界を風靡するに至つたのである。

たゞ文獻と遺跡との處理には、教授の手がけられたものがホメロスであつた關係上、不充分の點も認められるが、かゝる誤謬も、八十餘歳にしてなほ澁むことなき教授の勉學によつて除去され、掉尾の大作『古代アテネと其の市場』は珠玉の如き名篇として、後輩に尊い範例を示されたのであつた。

本書の出版の頃から、流石のデュルプヘルト教授も、老衰の佛が濃く、昨一九三九年にアテネに出て來られたときは、かなりの衰へに人々は危俱の眉をひそめたといはれる。生涯娶らなかつた教授は、レウカス島ニドリ町の思出の家で、下男と博物館の番人とを相手に過され、老體に鞭うつて著作三昧に耽けられたのであつた。處が本年四月廿日、突然、卒中の發作で倒れられた。應急手當によつて、其後の経過はやゝ良好であつたが、遂に意

識は充分に恢復せず、其の廿五日午後八時、眠るが如き静寂さの裡に逝かれた。葬儀は廿七日、全島民哀悼の裡に執行され、肉親としては妹のクリステイネ・フォン・ローデン夫人が參會されたのみであつた。そして教授は、生前かくも熱愛された此のレウカス・イタケー島の町にある聖キリアキ教會に、永遠の眠りをとられることになつたのである。(十五・六・九、羅馬にて)

註① 此の項は、主としてデュルプヘルト教授の Wie ich Altertumsforscher wurde ("Glaube und Heimat" Nr. 5, Athen, 1940) に據つた。

② 穹窿墳の少し上手にある宮殿址は、一九〇三年にマリノルト・エンケラフ教授によつて發掘された。遺物は附近のタローネ博物館である。

③ テマツ遺跡は、一九〇二年に原ツ Ecole française d'Athense によつて完全に發掘され、遺物はテマツ博物館に陳列されてゐる。

④ P. Kavvadias, G. Kawerau; Die Ausgrabung der Akropolis von Jahre 1885 bis zum Jahre 1890. (Athen, 1907.)

⑤ Dörpfeld; Die alte Athena-Tempel auf der Akropolis zu Athen (Mitteilungen des kaiserlich deutschen

Arkäologischen Instituts, Bd. X, 1885.)

⑥ ミネターネ城山の最頂部は昨夏、マナネの英國學會の手によつて發掘され、かなりの成績をあげた。ミネターネの發掘はほゞ此れで終了したと言ひうる。

⑦ Od. IX, 21-27.

⑧ Od. III, 81-82.

⑨ Od. II, 407.

⑩ Od. XVII, 205-206.

⑪ H. G. G. Payne; Archaeology in Greece, 1930-31 (Journal of the Hellenic Studies, Vol. LI, London, 1931) p. 195 and the same author's "Archaeology in Greece, 1931-32" (Ibid., Vol. LII, London 1932) p. 245.

⑫ J. Partsch; Das Alter der Inselnatur von Leukas (Petersmanns Geographische Mitteilungen, 1907).

⑬ U. von Wilamowitz-Möllendorf Die Ilias und Homer (Berlin, 1916), S. 498.

⑭ Dörpfeld; Die Ausgrabungen auf Korfu in Fritzhahre 1914 (Ath. Mitt. Bd. XXXIX, 1914).

⑮ Od. III, 5.

⑯ Dörpfeld; Alt-Pylos (Ath. Mitt. Bd. XXXIII, 1908).

⑰ Dörpfeld; Das Homerische und Klassische Nerikos (Ath. Mitt. Bd. XXXVI, 1911).

- ① 一九〇〇年に於けるシュリーマン博士の歿後、オットマン
 ント教授はトロヤの發掘を續け、一九〇四年に歸りて完結
 せられたるなり。
- ② Dörpfeld; Die Arbeiten zu Pergamon. I. Die Bau-
 werke (Ath. Mitt., 1902, 1904, 1907, 1908, 1910, 1912).
- ③ Brieftelegramm S. M. des Kaisers und Königs, Haus
 Doorn, den 26. Dezember 1933 (Danksagung von
 Prof. Wilhelm Dörpfeld, Leukas, 1934)
- ④ Dörpfeld; Das Alter des Heiligtums von Olympia.
 (Ath. Mitt. Bd. XXXI, 1906).
- ⑤ A. Furtwängler. Das Alter des Heraton und das
 Alter des Heiligtums von Olympia (Kleine Schrif-
 ten, Bd. I. München 1912, S. 446 ff.)
- ⑥ Danksagung von Prof. Wilhelm Dörpfeld, S. 1.
- ⑦ Dörpfeld; Meine Tätigkeit für die griechische ar-
 chäologische Gesellschaft (*Аρχαιολογική Εφημερίς*, 7A.
θηγα, 1937).
- ⑧ オットマン教授の著書「赫梯の遺蹟と掘り出し」の題に
 S. Glaube und Heimat, Nr. 5 以下を著せられたる Ph. Schäfer;
 Aus dem Leben der Gemeinden 以下に著せり。
- ⑨ デュルプフェルト教授著書目録
- ① Ueber Verwendung von Terrakotten am Geison und
 Dache griechischer Bauwerke (Berlin, 1881).
- ② Troja (Leipzig, 1884).
- ③ Das griechische Theater (Athen, 1896) (mit F.
 Reischl).
- ④ Das südliche Stadthor von Pergamon (Berlin, 1901).
- ⑤ Troja und Ilion (Athen, 1902). 2 Bde.
- ⑥ Das homerische Ithaka (Paris, 1902).
- ⑦ Leukas: Zwei Aufsätze über das homerische Ithaka
 (Athen, 1905).
- ⑧ Zweiter bis sechster Brief über Leukas-Ithaka (Athen,
 1905~10).
- ⑨ Olympia in römische Zeit (Berlin, 1914).
- ⑩ Die Bestattung der Toten bei Homer (München-
 Leipzig, 1917).
- ⑪ Das Schiffsager der Griechen vor Troja (Leipzig,
 1925).
- ⑫ Heimkehr des Odysseus (München, 1925).
- ⑬ Alt-Ithaka (München, 1927) 2 Bde.
- ⑭ Strabon und die Küste von Pergamon (Berlin, 1928).
- ⑮ Alt-Olympia (Berlin, 1935). 3 Bde.
- ⑯ Alt-Athen und seine Agora (Berlin, 1937-39). 2 Bde.